

九月二日

九時半頃京王デパートの地下階をいつもの通り歩いてきた。そうだなあ、身長百五〇センチメートルに満たぬ様な八〇才前だろう老女が一人ゆっくりと歩いてきた。背中に趣味の良い小さなバックパックを二つ背負って、おまけにシースルーの黒のショルダーバックも小さいきにかけて、細身のステッキをつけていた。その姿が誠に魅力的で、顔を思わず振り返ってみたら、女性なのに孔子みたいな顔をしていた。ゆっくり歩いてくる速度と姿が本当にピッタリとしていて良かった。何者なのだろう。山口勝弘先生に電話する。自画像シリーズを始めたので見に来いと、お元気であった。十時研究室。十時半梅沢良三先生来室。十勝その他の構造の相談。相変わらず梅沢さんの打ち合わせは速い。オーストリアの学生来室。来年よりの入室希望者である。

研究室のH・P編集者である丹羽太一の初めての編集雑記を今日初めて読んだ。不思議なもので、今、常日頃丹羽太一と同じ研究室という空間に居て、生活、勉強、仕事をしていても、私達は濃密なコミュニケーションは仲々発生しない。それはある種のわずらわしさを生み出しかねないからだ。学生達のデイスコミュニケーションとは程度が違うが、私だってデイスコミュニケーションの安楽さは時には好ましい。

丹羽の編集雑記を通読して、彼が私のやっている事、やろうとしている事を客観的に把握しようとしているのを知った。これは

私に対する質の良い批評である。同じ室に居ながら彼の文章をコンピュータで読む事で、その事実を理解するという、面白い狭間を、日常空間の中に発見することが今日できたのだ。要するに、山口勝弘の日常報告のようなものの内に、丹羽はワークス・フォー・マイノリティーのもう一つの枝を視たのである。指摘されてみなければ、余りに自明な事過ぎて、フツと通り過ぎてしまうところであった。ともあれ、編集者である丹羽の視点、思考が本格的に加わる事で、ようやく私のH・Pはチョッピリ厚みを増し始めたように思う。

十四時晶文社島崎勉さん来室。書き下ろしの相談。いよいよと言うか、そろそろなのか、書き下ろしで一冊の本をまとめなくてはならぬ時だ。「秋葉原感覚で住宅を考える」をはじめにして、ここ十年の総まとめを試みたい。年末までに百枚書くノルマにした。開放系技術論を中学生でも読めるような書き方で、まとめられないかと考えている。十五時早稲田大学事業部来室。コンバージョンの件。十六時大成建設来室、又もコンバージョンの件。二十一時前、曙橋より都営地下鉄線で烏山へ。彰国社でコンバージョンの座談会を終えて。今日だけで三件のコンバージョンに関する来客取材であった。今、私がやっているコンバージョン物件を紹介して一番大事な事は私のところがユーザー＝消費者達の組織者の役割を果たそうとしている事だろう。二十二時過世田谷村に帰る。月見草と雑草をかき分けて家に。短い、たかだか十数メートルのまさに廃園の雑草の小径を帰るのだけは、贅沢だと思うね。

TVニュースが自民党の総裁選の経過を伝えている。反小泉に結局、藤井、高村、亀井の3名が立つことになるらしい。それぞれがそれぞれの主張をTVで述べていたが、それを紹介する女性アナウンサーの方が品格、知性共に優れているように感じられた。

この三名は猿だな。しかし、政局は揺れるだろう。我々には予測もつかぬ事態が起こるのではないか。小泉首相は少なくともマスメディアの使い方、共調の仕方を本能的に知っている。この三人はそれさえも知らぬのがＴＶ画面から一瞬の内に伝わってくる。